

新居佑

表紙イラスト: ひなぐま

魔法少女

マカリアス


白濁の契約



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法生徒会長マジカルアスナ 白濁の契約』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法生徒会長

マジカルアスオ

白濁の契約

新居佑

表紙／ひなくま

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

すおう あすな

周防明日菜 / マジカルアスナ

聖イシュタル学園の生徒会長。面倒見のいい美少女で、男女問わず人気が高い。使い魔のセバスと出会ったことで、妖魔から生徒たちを守る、魔法少女へと変身することに。

セバス

白い毛並みと赤い瞳をした猫のような生き物。実は魔法の国の住人で、明日菜に魔法少女へと変身する力を与える。

「つと……これで先生方への報告資料は終わり。う~~~~んっつ！」

他の役員たちはみんな帰り、すでに自分ひとりしか残っていない聖イシュタル学園の生徒会室……その生徒会長席に座った周防明日菜は、椅子に腰掛けたまま、小さな両手を組んで人目をはばからずに大きく伸びをし、腰まで伸びる黒い髪の毛がふあざりと揺れた。

夏服に切り替わり、少し汗を吸い込んだ薄手のセーラー服を、豊かに育ったメロンを思わせる二つの瑞々しい果実を下からぐいっと押し上げる。

身長は同年齢の女子の平均程度だが、年相応の若さを残しながらも、確実に「女」への階段を昇っている明日菜の肉体は、すらっと引き締まりながらも、柔らかい媚肉がしつかりと乗っている。

掌に余るほどの巨乳はもちろん、短いスカートから伸びるむっちりとした太腿ときゅつと絞れた細い足首のラインは並みの読者モデル以上にコケティッシュな魅力に溢れている。面倒見のいいはつらつとした親しみやすさと、年齢以上に大人びた艶かしい色気を併せ持つ美少女生徒会長である明日菜は、男女の生徒問わず、そして教員たちからも人気が高い。その人気の高さが災いして今日のようにひとりで居残ることも少なくはないが、彼女自身の人一倍他人を思いやる努力家で優しいところが、また明日菜の人望の厚さの理由であり、本人もみんなの笑顔のためになると、快く仕事を引き受けてしまう。

でもそれは、誰かの力になりたいと日々願う明日菜にとって、とてもやりがいがあった、

意味のある日常だった。

「う、ん……っ。気持ちよかったあつ！ ……うそ、もうこんな時間なの!! ああ、急がないとっつ！」

背伸びを終えて時計を見ると、もう学園規定の完全下校時間を過ぎていた。

夏も間近なせいかまだ日没には早い時間が待ってはくれなかったようだ。

窓からグラウンドを眺めると、部活をしていた生徒たちもみな帰っており、照明の消えた校舎には生徒はおろか教職員すらも残っていないように思える。

「ああ、もう……やっちゃったあ。私のばかばかあつ！」

明日菜は普段人前ではあまり見せない慌てた表情を浮かべながら、急いで教室の鍵を閉め、早足で歩を進める。

生徒たちの規範となるべき生徒会長なのに、下校時間を忘れてしまうなんてと、自省しながら、誰もいない夕暮れの校舎を歩いていた、ちょうどそのとき。

「な……なんなのこれ……!？」

明日菜の目の前の見慣れた日常の景色がふいに……変質した。

別に周りの風景が一変したわけではない。目の前には廊下があり、横を見れば教室がある。けれど肌を感じる雰囲気は、明らかに違う。

不安を感じざるをえないおどろおどろしい感じが、明日菜の周囲を包み込んでおり、え

もいわれぬ寒気が背筋を駆ける。

すると、数メートル先の……無人のはずの教室でドガアアツツ！ とやけに大きな音が響いた。

「だ、誰なの？ まだ誰か残っているの!？」

急に湧きたった心の不安に急ぎ立てられるように、その教室へと向かった。

（なにか普通じゃない感じがする……誰かいるなら早く一緒に逃げないと!）

感じたこともない異質な空気の中、決して怖くないわけではない。けれど責任感と、そしてなにより正義感が強い明日菜に、誰かを見捨てて自分だけ逃げるような真似などできるはずもなかった。

どこか生ぬるい風に、艶やかな黒髪をなびかせながら、恐る恐る教室のドアを開ける。

「そ、そんな……っつ!!」

「せ、生徒会、長……!! だ、だめ……逃げ……逃げてくださいい会長！ きゃあああっつ!!」

ドアを開けた先には、信じられない光景が広がっていた。

整然と並んでいた机や椅子は力任せに薙ぎ倒されており、まるで教室で嵐でも逆巻いたような感じだった。

そしてそんなことより、明日菜の心を打ったものは、苦しげな悲鳴を上げる学園の女生

徒と、彼女の身体を荒々しく掴むほどの巨軀をした化け物の存在だった。

「ぐおおおおおおおっつっつ!!」

まるで相撲取りをさらに二回り、三回りは巨大にしたような怪物が教室の中央で、大きな猛りの声を上げた。

尖りきった耳まで裂けた口からはダラダラと涎が、でつぶりと張った腹にこぼれ落ちて
いる。

丸太みたいに太い手足は、人間ではありえない膂力をもつて、小柄な女生徒を握り持ち
上げている。

「くっ、こ……のおおおおおおっつっつ!!」

明日菜は反射的に近くに転がった椅子を両手で握ると、叫ぶ怪物に向けて駆けた。事情
はまったくわからないけれど、苦しんでいる少女を放っておけるわけがない。

明日菜は叫ぶと、渾身の力を込めて椅子を怪物に叩きつける。

「う、うそ……きやあああっつっつ!!」

せめて少女を引き離す隙くらいは作れると思った希望は、バラバラに砕け散った椅子と
同じように霧散する。

かすり傷ひとつつかなかった化け物は、見るも醜悪な顔に怒りの色を滲ませ、左手で力
任せに明日菜を払い飛ばした。

「か、会長……!!」

「う、くは……ううっ」

教室の壁に手ひどく叩きつけられた明日菜は、喋ることすらも辛そうな表情で、怪物に握られたままの女生徒を見つめた。

苦しそうに叫ぶ少女を前にしているのに、痛みで指ひとつ動かせない。生徒会長の役目なんてまるで果たせずに、大切な仲間がただ化け物の餌食になるのを見ているしかできないなんて……。

『彼女を助けたいかい?』

「え……な、なに……!!」

ふいに頭に響いた声に、明日菜は驚きを隠せなかった。

「ね、猫……なの?! なんでこんなところに……っ」

どこから迷い込んだのか……倒れこんだ明日菜の目の前に現れたのは、猫……と呼ぶのが一番しつくりくるけれどどこか違う、白い毛並みと赤い瞳をした不思議な生き物だった。まるで高価な宝石のように煌めく丸い瞳をこちらに向けて、明日菜をじつと見つめている。

『よかった。ぼくの声に気づいてくれて。さすがは明日菜だね』

「な、猫がしゃべ……いいえ、あ、頭に直接響いてくる?! それに私の名前……あ、あな

た一体!？」

『話は後で……それより明日菜。ぼくと契約してくれたら、きみに彼女を……ううん、学園の生徒みんなを守る力^カをあげるよ。どう? ぼくと契約して、きみは今にも死にそうな彼女を守りたいかい?』

猫(?)の言葉にはっとして女生徒を見れば、細い腰ごと今にも怪物に握りつぶされてしまいそうだった。

明日菜には迷っている時間も、断る理由もなかった。

「助きたい……私は彼女を、学園のみんなを守りたい」

『じゃあぼくと契約を……』

ためらうことはなかった。生徒会長である明日菜にとって、学園の誰ひとりとして傷ついたりしてほしくないのだ。

「結ばせて、あなたとの契約を。だからお願い、私にみんなを守る力をちょうだい!」

『ありがとう、明日菜。きみは本当にイイ娘だね』

声が途切れた瞬間、明日菜の胸の内側がカッと熱くなり、床に倒れていた彼女の身体がまばゆいばかりの光に包まれる。

「ぐ、ぐおとおおっつ!」

「か、会長……!」

突然の強烈な光に驚き、怪物の動きが止まり、女生徒が心配そうな声を上げる。

わずかの後、煌めく光がすうっと収束していく。その場所には、すでに聖イシュタル学園の生徒会長たる周防明日菜はいなかった。

そこに立っていたのは、気高さと同愛らしさを兼ね備えた、可憐なピンクの美少女だった。まだ成熟手前のちょうど食べ頃な果実のようなら若い肢体を包むのは、端々にフリルのついた、まるで人形の洋服のような可愛らしいものだ。

しかし見た目の可愛さに反して露出は高めで、肩から腕にかけてはスベスベとした素肌が丸出しになっている。

ウエストまわりこそ、さらさらしたピンクの布地で覆われているものの、ふわつとしたスカートの丈は短めで、肉つきのよいおみ足が健康的なまぶしさを見せている。

可憐で美しい少女の姿は、地上に舞い降りたか、物語の中から現れた天使を想起させるほどに力強く輝いて見えた。

「こ、これって……!?!」

『それは魔法のローブだよ。明日菜がぼくと契約してくれたおかげで、きみはみんなを守る力を手にしたんだ。もうただの明日菜じゃない。きみは魔法少女になったんだ』

自身の格好のあまりの変わりぶりに驚く明日菜に、猫のような生き物が答える。

「ま、魔法少女……私が……」

『ふふ、さあイクんだ明日菜。そうすればきみは本当の魔法少女になれるよ！』
「い、いやああっ！ イカないいいつ！ 私は絶対にイカ……むほおおおおおおおつ
つ!!」

なおも快楽を拒絶しようとする明日菜に、強烈な快楽の電撃がはしった

媚毒のせいだろうか。プシイイツ！ という音を立てながら、明日菜の豊乳から、文字通りの母乳が噴出してきた。

まだたいした勢いではない牝の白濁は、けれどいくつももの乳腺から一度に快楽の心地よさを伝えてくる。

それは、崩壊寸前だった明日菜の理性を完全に打ちのめすのに十分すぎる一撃だった。

「お、ほおおおおおおつ！ イクツ、もう無理いいつつ!! イツちゃうつつ！ わらひ、みんなの前れえ、アクメ晒すつつ、魔法少女なのにイグウウウツ！ んおおおおおおつつ!!」

全身が突っ張って、これまでなんとか理性の光を灯していた切れ長の黒い瞳が、抵抗むなしく一瞬にして白目を剥く。

だらしなく舌が垂れ下がりが、ぎゅんつ！ と振り返った肢体が、彼女が久方ぶりへの絶頂へと導かれることを、生徒たちに知らせてくれる。

『さあ、イっちゃえ。淫らで情けない魔法少女さん』

もうセバスの声など聞こえない。

ただ感じるのは、押し寄せてくる快楽の奔流。これまで必死に抑えつけてきた女の至極だ。メロンみたい膨らんだバストの中で、はしたないミルク溜まりがゴポゴポと熱を帯びているのがわかる。

完璧に開ききった乳腺にたつぷりとつまった牝乳が、決壊したダムみたいに一気呵成に快楽の乳しぶきを上げる。

ブッシュウウウツツ!! ドプアアアアアツツ!!

「ほっおおおおおおおんんんっ!! お、ほおおおっ!! こおおっ、イグウウツツ!! こんらのイグツツ! おっぱいにクリトリスっつ、発情ひて媚薬まみれでなんて……イグに決まってるっ!! ほおっ、んおおおおっ!!」

まるで壊れた噴水のように、二つの乳首と股間から盛大な牝のミルクと潮吹きが高々と噴出される。

同時に、清楚可憐な生徒会長とは思えない太く深い、快楽に屈服した牝の咆哮が体育館中にこだまする。

「う、わあ……自分の汁でベチャベチャだぜ。本気で白目剥いてるしな」

「やっぱりビッチよ。ひどいイキ顔。あんなのが生徒会長で、正義の味方だったなんてね」
「お、ほおおおおっ!! ひ、ひがうのおおっ……ああっ、ミルク止まらない……わらひ

ビッチじゃら……ほひいいつつ！ イグイグイグウウウツツ!!」

訂正したくても、まともな言葉さえ紡げない。喋る暇はまるでなく、ただただ脳内でスパークし続ける感じたこともない快樂物質の爆発に、明日菜は恥も外聞もなく、ただ一匹の牝として吼え続けた。

「連続でイグウツ！ もうイクしかできないっ！ もうやめれええつ、!!」

みんなを守る正義の魔法少女であるために、これまで我慢してきた分の絶頂をさらに何十倍にも増幅されて受け続けるような終わりの見えない連続絶頂に、明日菜の心までが悦楽へとグズグズに蕩けていく。

(き……気持ちイイのが、イクのがくせになっちゃってるううつつ。気持ちイイ気持ちイイつつ！ も、もうどうなってもおおつつ!!)

汁だらけになりながら、戦うこともできずに見下されてしまう。このまま快樂に狂うことができたなら、どれだけ幸せだろうと本気で考えてしまう。

だが、明日菜は思い知らされる。今の快感など所詮、子供のお遊び程度でしかないことを。『明日菜。ぼくが今まできみのオマ○コに手を出さなかったこと、なんでだかわかる?』

「オマ……!? なっ、まさか……いまか、らああっ!!」

いじわるそうな声で告げられる絶望的な事実、明日菜の顔が恐怖、そして、それを待ち望む牝の悦びの表情を見せる。

「んはあつ、や……やめ……そこだけは……つつ。いやああああつ!!」
 それまで空中で仰向けに飄られていた明日菜の身体が、触手によって生徒たちのすぐ目の前に連れていかれる。

しかもその格好は、生徒たちに明日菜の恥部がはつきりと凝視できる屈辱のM字開脚だ。
 「す、すげえ。これが生徒会長のオマ○コか……エロすぎだぜ」
 「なにもされてないのに、もうぐっしより……本当淫乱な女ね」

いまだにイキまくっている身体では、絡みつく触手たちに抵抗などできようはずもない。生徒たちの前にパツクリと開帳させられた牝の花園は、いやらしい淫汁をドブドブと中央の切れ込みから吐き出しながら、周りの媚肉を真っ赤に充血させて、女の穴に太いなにかを突きこまれるのを、今か今かと待ち望んでいる。

「ひっ、ひぎいっつ！ お、あああつ……やめ……気持ちイイッツ！」
 蜜壺をジュルリツと、ブラシ状の触手の先端で軽く撫でられただけで、ゴプツツ！ と濃い本気汁があふれ出す。

背筋を貫くような快感の電撃に、身体が釘づけにされて、拒絶の言葉も、抵抗の意志すらも見せられない。

『きれいな処女膜だね。処女を汚い触手に奪われるってどんな気分だい？ まあ、とつても気持ちよくなることだけは保証してあげるよ明日菜』

「い、いらないつつ！ そんなこといいから、やめさせて……お願い、お願いよおおつ
つ!!」

『あははっ、こんなにイキまくってるのに、それでも乙女な夢は捨てないんだ。魔法少女らしいよ。正義のものになる前に、きみと契約して本当によかった。だからね明日菜——』

セバスの意志に應えるように、触手が一本、二本……三本と重なり、見たこともない巨大な男根を形成する。

まるで鍛えた男の腕かと思えるような太すぎる逸物が、ドロドロとした先走り汁を鈴口から垂らしながら、M字開脚の明日菜の女を中心へ狙いを定める。

「そ、そんな太いの入らないつつ！ 私の壊れちゃうつつ、お願いやめてええつつ!!」

『一思いに散らせてあげるよ』

ブチイイイツツッ！ ビチ、ビチイイイツツ!!

今までなにも受け入れたことのない純潔の証が、無残に音を立てて引きちぎられていく。触手によって突き破られた処女膜は破れたと同時に、赤い鮮血を滲ませ、痛みとともに明日菜に自分の初めてが触手によって奪われたことを思い知らされる。

「あ、ああつつ……そんな、うつつ」

悲しみに溢れそうな感情、だがそれさえも快楽の大波に吞まれてしまう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>